OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

September.2021
No.60

2021年3月誕生
国際学生寮「インターナショナル・レジデンス」

関東学院大学の新たな学生寮「インターナショナル・レジデンス」。横浜・金沢八景キャンパスから徒歩約2分にあり、
図書館や情報施設などの大学施設を有効に活用できる。各居室は換気にも配慮。
スタッフ常駐のレセプション、共用ラウンジ、キッチン付き共用ダイニングスペース、テレビルームやシアタールーム、スタディラウンジ、オープンテラスなどを完備。
様々な地域や国の学生約400人が共に学び、共に暮らしながら、多様な価値観と高度なコミュニケーション能力を磨くことができる、新しいコンセプトの国際学生寮だ。

各校の方向性を尊重しながら連携を強め横浜の総合学園としての新たな価値を創造する

2021年4月、学校法人関東学院では理事長、大学長、中学校高等学校長、六浦小学校長、のびのびのば園長、および法人事務局長が新たに就任しました。そこで6人の新リーダーに現在の心境と将来への抱負をうかがいます。最初にお話しいただくのは、理事長の規矩大義氏です。関内進出プロジェクトをはじめ、学院が大きく変化する時代において3期（約7年）にわたり大学長を務められた手腕で学院を牽引します。

異なる個性を強みに特色ある教育を

今年3月まで約7年にわたって大学長を務めさせていただきました。その間、これからの関東学院が抱える様々な問題点が見えてきたのと同時に、学院がさらに大きく変わっていける可能性があることもわかってきました。そうした中で、これまで学院が着実に進めてきたことを、次の世代、さらにその次の世代へと確実にバトンタッチしていかなくてはいけないと感じ、今回、理事長という任をお引き受けさせていただきました。

昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で、各校は手探りの対応に追われたことと思います。私自身も当時は大学のことしか見えていませんでしたが、今、理事長として法人全体を見渡すと、昨年1年間の経験を元に各校がきちんと対策していることを大変心強く思っています。

関東学院は、2つのこども園、2つの小学校、2つの中学高等学校、そして大学・大学院が、それぞれ特色ある教育を実践しています。学院として「こうあらねばならない」と方向性を統一することは、一見すると聞こえはいいのですが、それぞれの個性をスポイルする要因にもなり得ると思っています。例えば小中高でいえば三春台校地と六浦校地、どちらも同じ方向を向いてしまうと、結果的に両方の良さを潰してしまいます。だから多少、型破りであっても、関東学院という大きな枠組みの中から飛び出してしまわない限りは、その個性や方向性を尊重して自由にやっていただくことが一番大事ではないかと思います。

もちろん、自由とは好き勝手にやっていいということではありません。自由に考えた結果が、この先の学院にとって良いものだと判断すれば積極的に支援しますが、逆にそうでなければ「もっと全体を見てきちんと考えるべきだ」ということは、はっきりと伝えていかなくてはいけないと思っています。

一人ひとりの意欲を学院の成長に繋げていく

4月以降、理事長として各校を回って、学長、校長先生、園長先生と個別に話す機会を持ち、それぞれの学校の立場や様々な努力をされていることが改めてよく理解できました。一方で、いくつかの問題点に対しては、経営面を含め、学院として将来に向けた改革を進めていかなくてはなりません。今までのやり方をガラッと変えるわけではありませんが、各校の変えていくべき部分と支援すべき部分をきちんと見極めて、メリハリのある対応をしていく必要があるでしょう。

一方で、特に高校以下の教職員や、小さな子ども達を目の前に仕事をしているこども園の皆さんは、日々の仕事に忙殺されるところもあると思います。そうした業務の中で、学院の経営に配慮した細かな制約や、我慢を強いることは決して正しい改革とはいえません。教職員が一生懸命に働ける環境、結果的にそれが学院全体として良い方向に向かうような環境を作ってあげることが、日頃そこにはいない私達の仕事であり責任なのだと思っています。だからこそお願いしたいのは、子ども達を育てる意欲と共に、関東学院で働く一員であるという意識は常に忘れないでほしいということです。それがあるからこそ、皆さんのやりたいことを私達はバックアップできるのだということを、一人ひとりが感じ取っていただければと思います。

関内プロジェクトは発展の一つの通過点

大学は、規模でも予算面でも、学院全体の非常に大きなウェイトを占める存在です。小山学長が就任されて以降、特に「研究」というキーワードを積極的に打ち出してくださっています。高等教育機関として、大学は研究者としての姿を学生に見せるからこそ教育ができるのであり、その担い手である先生方の研究を社会にアピールしてゆくことを学院として注力していきたいと考えています。

大きなプロジェクトとしては、2023年に「横浜・関内キャンパス」が開校します。現在、建設は順調に進んでおり、その中身については大学を中心に検討を進めてくださっています。一方で、これは非常に大きなプロジェクトではありますが、俯瞰的に見れば、関東学院としてはごく当たり前の選択であり、発展していく中の一つのプロセスに過ぎません。その先には次の発展もあるはずで、今回のプロジェクトに関わっている方も、関わっていない方も、次にはまた新たな関わり方で貢献していただけるのではないかと期待しています。

六浦ベルトの型にはまらない教育

大学ではここ数年、社会連携教育を精力的に進めています。各校各園においても、大学の資源等を活用して、今まで以上に地域と繋がる活動を推進できればと思います。その具体例の一つとして進めているのは六浦中高と六浦小学校、いわゆる「六浦ベルト」の構築です。特に六浦中高には、歴史の長い三春台とは全く異なる、飛び抜けた個性を持つ中高を作ってほしいと思っています。例えば、寮を持つ私立中高として、既にラグビー部には全国から生徒が集まってきていますが、今後はさらに帰国子女や海外駐在員のお子さんをお預かりしたり、個性豊かな子ども達に集まってもらいたいですね。すぐ隣には大学のキャンパスがあるので、大学の資源もうまく活用して、将来は海外の大学へ飛び出してもいいですし、関東学院大学に戻ってくることも大歓迎です。そういう形で同じ関東学院の中で、小中高、あるいは高大で連携が進めば相乗効果が生まれ、それが地域に波及して、やっぱり関東学院との繋がりは大事だなと感じていただければ、より一層地域に根差していけるのではないでしょうか。

関東学院 理事長
規矩 大義

1993年九州工業大学大学院工学研究科博士後期課程修了
横浜国立大学工学部建設学科助手を経て官民の防災研究の職場を経験
2002年 関東学院大学工学部着任
2013年12月 同 学長就任（～2021年3月）
2019年4月 同 防災・減災・復興学研究所長（～2021年3月）
2021年4月 学校法人関東学院理事長就任

2023年4月開校予定 横浜・関内キャンパス

幅広い「研究力」と「社会連携教育」を軸に知の交流拠点としての価値を高めていきたい

関東学院大学の新学長に小山嚴也経営学部教授（前経営学部長）が就任されました。「世間からずれていることが大学の価値だと思う」と話す小山学長。ユニークな発想と経営学的な視点で、学内外で連携を深めながら「教育力と研究力の向上」に取り組んでいます。

新たな個性の発掘と長期的視野に立った教育

少子化問題に加え、コロナ禍による打撃を受けて教育業界全体が厳しい状況に直面していることは間違いありません。今までのやり方が通用しなくなっている中、生き残っていくためには、他にはない個性を創造し、差別化を図っていくことが必要です。一方で、大学には手付かずの領域がまだまだ多いと感じています。企業では当たり前に行われているマーケティング分析や戦略的な取り組みを、大学でも精力的に行って新たな資源やアイデアを掘り起こしていければ、様々な可能性が見えてくるのではないかと思っています。

18歳人口の減少が進む一方で、大学の授業に対する保護者や学生の期待、社会からの要求はますます高まっています。そうしたニーズに対して何を提供し、どう差別化していくかを考えた場合、はたして今この瞬間に求められていることを刹那的に提供することが大学の役割なのかといえば、それは少し違う気がしています。というのも、世間はとても移ろいやすく、3年前に求められていたものと、コロナ禍以降に急速に変化した社会で求められるものとでは全く異なっています。だから社会の動きや感覚は常に意識しつつも、短いスパンで物事を捉えずに、もっと長く俯瞰的な視点で我々が持つ知的な資源や財産を活用して、他大学では得られない何か、それも少なくとも20年は生き続けるような何かを学生や地域社会に対して提供していきたいと思っています。

本学でいえば、その核となる部分に「歴史とキリスト教」があります。歴史は買うことはできません。横浜という大都市で、キリスト教の精神に基づいた教育を140年近く行ってきた歴史は、競争優位の源泉になります。また、歴史は「知の蓄積」でもあります。卒業生を含めた人材の蓄積および経験の蓄積があることは、我々の大きな拠り所となっています。そして、さらなる差別化の要素となるのが「社会連携教育」と「研究力」だと考えています。

持続的な学びへ繋がる社会連携教育を推進

本学は2014年に社会連携センターを開設し、地域に根差した「社会連携教育」を標榜しています。課題は教室の中ではなく、社会の中にあります。学生は社会に行って課題を見出し、教室では課題を解決するために必要な教養や知識を身につけます。それを何度も繰り返すことで、学びの意味が理解できるのです。学問とは先人達の知恵の結晶です。実際に課題と向き合った時、誰かの発明や研究の上に乗っかり、足りない部分を試行錯誤していくことで新たな理論やモデルが生まれます。そうした学びの本質を知れば、どんなに社会や時代が変化しても対応していけますし、そうした人材を育てるツールが社会連携教育です。横浜市は人口約380万人、東京以外では日本最大の都市です。県庁や市役所、企業やマスコミが身近にあり、スポーツや芸術も盛んな横浜でいち早く社会連携教育を推進してきた「先行者のメリット」を最大限活かし、より一層、地域や企業との連携を深めていきたいと思います。

2023年には社会連携教育の新たなプラットフォームとなる「横浜・関内キャンパス」が開校します。法学部、経営学部、人間共生学部コミュニケーション学科が移転しますが、研究棟は学部ごとにフロアを分けず、自然に学部を超えた交流ができる環境にしたいと考えています。同時に横浜・金沢八景キャンパスには国際文化学部と社会学部が移転します。既に学部横断で議論が始まり、それぞれの持つ教育資源の中で新たな社会連携教育の構想が進んでいます。

分野を超えた教員の交流で研究力を高める

今、学内で呼びかけているのは「研究力」を高めることです。大学院や材料・表面工学研究所等を含め、本学には興味深くユニークな研究をしている教員や学者がたくさんいます。それをもっと学内外に周知させたいですね。また、教員同士が分野を横断して交流できる仕掛けや場を作りたいと思っています。私自身も最近、服飾学や経済、英語、情報システムなど、他の学問分野の教員達と語り合う機会を得て大きな刺激となりました。分野を超えて教員が議論し、共感や新たな視点を得ることで研究促進のモチベーションや契機になれば、その成果は学生に還元されます。

学内のユニークな研究を掘り起こして、大学として事業化する構想も持っています。自分の研究を事業化したくても、経営のことはよくわからないという先生もいると思います。本学には経営学者や実務家出身の教員、マーケティングの専門家もいるので、チームとして事業化を推進できれば、我々が標榜する社会連携教育の付加価値にも繋がるでしょう。

アカデミックな空気が漂う教育と研究の拠点に

幅広い領域を擁する総合大学として、教員や学生が分野を超えて議論し合える、知的な雰囲気が漂う大学にしていきたいですね。また、そうした空気を地域の高校生や社会人とも共有したいと思います。この7月に横浜市立東高等学校と連携して、200人以上の同校生徒が横浜・金沢八景キャンパスを訪れ、SDGsの視点に立った様々な研究に触れるワークショップを開催しました。非常に好評で、こうした高大連携の取り組みはもっと増やしていきたいです。さらに今後リカレント教育が広まって、リアルな現場を体験した社会人がキャンパスに戻って来れば、学生や院生との交流による学びの相乗効果も期待できます。様々な仕掛けで教育と研究を活性化し、多様な人が学び合う「知の交流」と「社会連携教育」の拠点として、関東学院大学の存在感をさらに高めていきたいと思います。

関東学院大学 学長
小山 嚴也

1996年 一橋大学大学院 商学研究科 博士後期課程単位修得退学
2001年 関東学院大学 経済学部経営学科着任
2014年 同 副学長就任（～2019年３月）
2019年 同 経営学部長就任（～2021年３月）
2021年４月 同 学長就任

地球温暖化と自身の研究をからめて高校生に説明する大塚雅之教授

材料・表面工学研究所も研究力をアピール

規矩大義教授は防災をテーマに講義

宗教リテラシーを養い、多様性を受容できる人材を育成

関東学院中学校高等学校は森田祐二校長が新たに就任されました。提唱する「OLIVE STREAM」についてうかがいます。

新たな教育ビジョンを発信

入学した子ども達がどんな経験を積み、将来どんな人間に育っていくかというストーリーが見えることは、学校としてとても大事なことです。校長に就任して最初に考えたのは、学校としてのわかりやすいメッセージをどのように対外的に伝えていくかでした。まずはこの学校を理解するために、外部の学習塾や教育事業の方々と積極的に会って話を聞きました。そこで感じたのは、関東学院は歴史と伝統のある学校というイメージがとても強い一方、先進的な教育については十分に伝わっていないということです。実際に校内を見渡してみれば、一歩進んだ取り組みや環境が多くあるのに、それぞれが点として存在し、線として結んで発信できていないのだと思いました。

イノベーションとは、必ずしも全く新しいものを創り出すことではなく、今あるものを組み合わせて新たな形で示していくことも一つのイノベーションだと思います。そこで、今ある点を線で繋いできちんと外へ発信しようと考えたのが、教育ビジョン「OLIVE STREAM」です。

科学(サイエンス)、技術(テクノロジー)、工学(エンジニアリング)、数学(マセマティクス)の4つの頭文字を繋げた「STEM教育」は、元々アメリカから始まった理系重視の教育モデルです。そこに創造性を豊かにする芸術(アーツ)や教養(リベラルアーツ)を表すAを加えた「STEAM教育」は今、日本でも文部科学省や経済産業省を中心に推進されています。本校ではさらに宗教のR(リリジョン)を加え、教育ビジョン「OLIVE STREAM」として発信します。キリスト教をベースとして宗教観を養い、社会や世界への目を開かせて幅広い知識と技能を育みます。

同校が考えるグローバル教育

今の時代、日本にいても仕事や生活の場で外国人と接する機会があります。その多くは何かしらの宗教を信仰し、自分の中にある種の哲学のようなものを持っています。一方で多くの日本人にとって宗教観は理解しにくいものです。キリスト教主義学校には聖書や礼拝など宗教について考える時間があり、それを6年間も続けると、自然と宗教を哲学として持つ人達の感覚がわかるようになります。これはクリスチャンであるなしにかかわらず、非常に重要な概念です。

キリスト教主義学校である本校が考えるグローバルは、ビジネススキルに長けているとか、英語やマーケティングの知識があるということではありません。多様性を受け入れることができる、あるいは弱く小さな声に耳を傾けられることであり、その素養が備わっていることは将来の大きなアドバンテージとなるでしょう。

STREAMのうち、理系教育を表すSTEMの面でいえば、例えば本校には5つの理科実験室があり、ハイレベルな教育を行っています。中でも私が驚いたのは地学実験室で、普通の学校にはまずありません。本校は理系の割合が文系とほぼ同じで、その割合の高さは実験室を含めた教育の成果かなと思います。

また、Aにあたる芸術や教養の面でいうと、充実した教養講座が挙げられます。韓国語講座や中国語講座なども選択でき、現地の学校とオンラインで繋いで生徒同士がやり取りしています。また、焼き窯やろくろを備えた陶芸室があり、生徒達が創作活動を通じて表現力を養っています。他にも様々な取り組みがあり、それらを結び付けて成長への流れ(STREAM)となっていることを学外へ発信したいと思います。

関東学院中学校高等学校 校長
森田 祐二
愛知大学文学部英文学科卒業後、名古屋学院中学校・高等学校(現 名古屋中学校・高等学校)に英語科専任教諭として着任
2017年 同 校長就任
2020年 同 学監就任
2021年4月 関東学院中学校高等学校校長就任

キリスト教の理念と「六浦小モデル」の推進

関東学院六浦小学校は松田和憲学院長(兼任)に就任されました。子ども達の未来への思いと個性を伸ばす取り組みについてうかがいます。

信じて種を撒き続ける教育

私は関東学院大学で20年以上教鞭を執ってきました。また、関東学院では学院長を兼務し、マクロ的な視点からキリスト教の理念を伝え統括する立場にあります。一方、小学校では教員が毎朝10分程度の朝会を行い、子ども達が聖書を読んだりお祈りをすることから一日をスタートし、そしてまたお祈りによって小学校での一日を終えます。日常生活の一部として形骸化することなく、自分達の生きるベースになっていることは、キリスト教教育の基本であると思います。

礼拝堂に身を置いて讃美歌を歌ったり、聖書を読んだりお祈りをすることは、子ども達にとっては不思議に感じることも多いかもしれません。私の専門領域はキリスト教の宣教学ですが、40代や50代で教会を訪れる人達を調べると、その約90%は子ども時代にキリスト教系の学校や教会に通っていたという統計があります。つまり、その人達の中に子どもの時に蒔かれた種が残っているのです。その頃はよくわからなくても、人生において壁にぶつかり行き詰まった時、子どもの頃に感じたぬくもりを思い出して教会に戻ってくる人が少なからずいるのです。

その意味において、私達の教育は種蒔きではないかと思っています。もちろん、知識を授けることも学校の大きな役割ですが、キリスト教学校はそれに加えて、心を育てる、そして内面的な大切なものを語り継いでいく使命があります。子ども達に蒔かれた種がいつか芽吹き、育って実を結ぶことに対する信頼を持って、日々の教育に向き合い、種を撒き続けることがキリスト教教育です。そうした長いスパンで教育を考えることが、今の時代には必要なことではないでしょうか。

学びを個性化する「六浦小モデル」

六浦小学校の特長的な取り組みとして、個性を伸ばす教育を目指して2019年度から実施している「六浦小モデル」が挙げられます。教科や単元によって習熟度別や選択型授業を行う「私のパレット」、自分でテーマを設定してとことん追究する「私のポケット」、わくわくする学校環境を作る「私のドア」という3つを柱に、主体性や創造性を育てる学びのシステムです。当初は23年度までの5年計画で、20年度までを試行期間とし、今年度より本格実践期となる予定でしたが、コロナ禍の影響を考慮して試行期間を1年間延長しました。今はちょうど中間地点ですが、非常にユニークな取り組みであり、これが実を結んで学校教育の一つの新しいスタイルになることを期待して今後も取り組みを続けていきます。

関東学院の組織的な連携

学院長を兼務する私の立場を良い意味で利用するとしたら、「六浦ベルト」すなわち六浦こども園、六浦小学校、六浦中高、関東学院大学と続くラインの連携教育をより推進したいと考えています。以前から学院内連携の重要性は繰り返しいわれていますが、必ずしもうまくいっていなかったという反省があります。改善されつつはありますが、まだまだ道半ばといえるでしょう。

ALL KANTOとして様々な形でバックアップや協力をし合い、単独の学校では真似のできないプランを実現すれば、お互いにとってメリットは大きいはずです。総合学園の強みを再確認し、良い影響を与え合えるような連携を検討していきたいですね。今はまだ十分ではないと感じますので、それがもっと組織的にできるよう、六浦以外のエリアも含めた学院全体で相互補完的な関係が築ければと願っています。

関東学院六浦小学校 校長(関東学院 学院長兼任)
松田 和憲
多くの教会で牧師を務め1999年関東学院大学工学部着任
以降、大学宗教主任、学院宗教主任を歴任
2009年野庭幼稚園(現 のびのびのば園)園長を兼任(〜2014年)
2018年12月 関東学院 学院長就任
2021年4月 関東学院六浦小学校 校長兼任

無条件の愛を実感することが成長の糧になる

関東学院のびのびのば園は仲程剛園長が新たに就任されました。新たな視点を獲得して地域に貢献するこども園を目指しています。

「根拠のない自信」を育みたい

大学卒業以来ずっと横浜の公立学校で教育に携わり、このたび縁あってのびのびのば園の園長を務めることとなりました。人生のスタート地点にある乳幼児期の教育に携わるということは、私自身、自分が何を大切にして生きているのかということを改めて問わざるを得ない場所に来ているのだなと感じています。

私は子ども達の中に「根拠のない自信」を育むことはとても大切なことだと思っています。何か良い行いをしたから愛されるのではなく、「自分は自分のままで、皆から愛されているんだ。なぜかはわからないけど自信がある」と子ども達が実感すること、そこから得られる「根拠のない自信」は、子ども達がこれから様々な経験をして成長するためのバックボーンとなるものです。それは「自分が神様から無条件で愛されていることを実感し、自分を愛し、同じように周りの人達を愛する」という、のびのびのば園の保育理念とも繋がります。そのキリストの愛を、子ども達だけでなく、保護者や職員にも伝えることが私の役目ですし、それにはまず誰よりも自分自身がそのことを実感しなくてはいけないと思っています。

のびのびのば園は「あそびが学び」をテーマに、遊びを通じて主体性や社会性の育成に取り組んでいます。自分でやりたいことを選び、夢中になってのめり込むことで、たとえ困難にぶつかっても自ら乗り越えようと創意工夫したり、友達と協力することができるのです。自分の好きなものを見つけて頑張る力、やればできちゃうんだという実感、それは先程申し上げた「根拠のない自信」が土台となって、また育まれていくのです。そして将来にわたって子ども達の成長を支えてくれることでしょう。

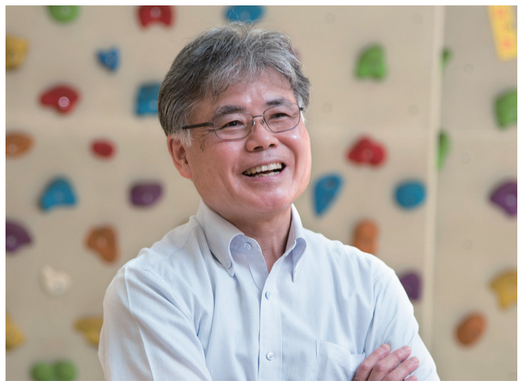
特別支援教育の視点を取り入れる

性別や国籍、家庭環境、個性など、教育現場でも多様性への対応がよく論じられています。この園にも様々な子ども達がいます。私は前職が特別支援学校の教員だったこともあり、職員一人ひとりが特別支援教育の視点を持って子ども達を見てほしいと考えています。それは必ずしも障がいのある子どもを受け入れるということではなく、一人ひとりを大切に、まずは存在そのものを肯定していくことから始めるということだと思います。私達は誰もが何かしらの支援を受けて生きています。目の前の子どもが、何が得意で何が苦手なのか、伸ばしたり改善するにはどんな方法があるかという視点は、障がいの有無にかかわらず全く同じです。そういう見方、考え方、捉え方ができる人を育てていきたいと思っています。

子育てと地域連携のターミナルに

子育て支援は、認定こども園に最も求められている役割です。この園でも、地域のお母さんと子どもが一緒に過ごせる場を提供したり、未就園児の親子のクラス、園庭でのプログラムなどに取り組み、子育てを軸に地域交流や情報発信ができるターミナルを目指しています。

さらに推進したいのが地域社会への貢献です。私達の園では地域連携担当者がすごく頑張っていて、地域の方々と協力しながら様々な活動を行っています。7月には港南台の無印良品とのコラボ企画で、園児がエコバッグの意義を学び、自分でバッグに絵を描くワークショップを行いました。園児も保護者もとても楽しんだ様子で、こうした体験の場を地域の子ども達にも広げていきたいと思います。キリスト教教育を実践する関東学院の「のびのびのば園」であると共に、野庭地域の中の「のびのびのば園」ということを大事にしたいですね。



関東学院のびのびのば園園長

仲程 剛

沖縄県出身、上智大学理工学部化学科卒業
横浜市立の中学校に特別支援学級担任兼理科教諭として着任を経て
2009 年より横浜市立の小学校長、特別支援学校長
教育委員会指導部特別支援教育相談課長等を歴任
2020 年 3 月 横浜市職員を定年退職
2021 年 4 月 関東学院のびのびのば園園長就任

ベクトルを合わせ270名の職員の力を最大化したい

学校法人関東学院では小松原光裕法人事務局局長が新たに就任されました。職員の力を結集してキャンパス再編と学院の発展を支えていきます。

2023年の事務体制の検討

関東学院には現在約270名の職員がいます。以前はそれぞれが勤務する学校に所属する形でしたが、昨年度から大学以外の各校職員は法人事務局に所属する体制となり、以前に比べると各校とも連携が取りやすくなったと感じています。

職員は直接の教育をすることはありませんが、大学の例でいえば先生方よりも勤務年数が長い職員が多く、また、人事異動により複数の部署を経験することから、多角的複眼的な視点で学院や学校を見ることができると思っています。そういう意味では、学院のカラーや空気を継承していくことも、職員が担う一つの役割ではないかと感じています。

「横浜・関内キャンパス」が開設する2023年は、学院にとって大きな転機となります。現在、大学内に担当部長を配置し、その下で職員36名による事務運営検討プロジェクトチームが各領域の運用方法等の検討を進めています。関内進出と同時に、金沢文庫から金沢八景に移転する学部もあるので、関内だけでなく全学的な視点で事務体制を整えることが必要です。

これまで学院は横浜・金沢文庫キャンパスや湘南・小田原キャンパスの開設を経験していますが、これらは毎年1学年ずつ学生が増えていったのに対し、今回は4学年全員が一度に移転することが大きな課題です。さらに社会連携を広く展開するとなれば、これまで私達が経験したことのない様々な業務が出てくるのではないかと思っています。

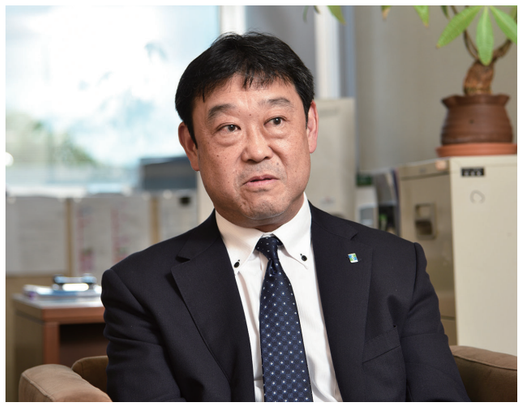
一方で、今回の関内進出にあたって職員の増員は予定しておりません。これまでの学院の周年事業など大きなイベントの経験を振り返ってみますと、私は本当に学院の職員はすごいなと思っています。方向性を示して各部門のリーダーに任せれば、必ず期待以上の結果を出してくれます。今回も職員が同じベクトルを向いてまとまることができれば、必ず乗り越えられると思いますし、その方向を示す旗振りが私の役目だと考えています。私自身の仕事に対する考え方でもあるのですが、柔軟に臨機応変に、前例のないことでもまずはやってみて、失敗したら修正しながら、前へ前へと転がしていきたいと思っています。

様々な情報共有の可能性を探る

日常の業務でいうと、一昨年から「Teams」や「Agile Works」といったビジネスツールの利用が、部署によって差はあるもののだいぶ広まってきました。キャンパスを横断した職員や教員の会議はもちろん、学生とのやり取りにも活用できれば、キャンパス間の距離を縮めることにも繋がりますので、様々な可能性を含めてプロジェクトチームで検討していただければと思っています。

学院内での情報共有はもっと進めていきたいです。所属長へのヒアリング等により学校や職員の状況把握に努めています。また、公式な会議だけでなく、日常会話レベルで意見交換できる場も作っていきたいと思っています。

職員の皆さんには、学院の運営に携わっているという認識を持ち、自分がやっていることがどこに繋がっているかということを改めて考えていただければと思います。最終的には学院に通われている学生、生徒、児童、園児の皆さんに、関東学院に来て良かったといってもらえるような学校、学院にしていかなくてはいけないので、自分の立場として、部署として、何ができるかを常に考えながらやっていただくことが大切だと思います。職員の力を結集できれば、この学院はもっと素晴らしくなると確信していますので、そのための環境作りに精一杯取り組んでいく所存です。



関東学院 法人事務局局長

小松原 光裕

1986年 関東学院大学経済学部卒業
同年に関東学院就職、大学および法人にて
入試、人事、教務、庶務、総務の現場を経験
2019年 関東学院 法人事務局総務部長就任 (～2021年３月)
2021年４月 同 法人事務局局長就任

大学卒業生が日本造園学会賞（設計作品部門）を受賞

撮影　吉田写真事務所 吉田誠

丘陵地に広がるランドスケープ空間

5月22日開催の公益社団法人日本造園学会主催「２０２１年度日本造園学会全国大会」で、関東学院大学工学部建築学科（現建築・環境学部 建築・環境学科）の卒業生である石井秀幸さんと野田亜木子さんが手掛けた「町田薬師池公園 四季彩の杜 西園ウェルカムゲート」が日本造園学会賞（設計作品部門）を受賞しました。

町田薬師池公園 四季彩の杜は複数の公園から成り、東京都町田市の自然や文化に触れられるエリアです。ウェルカムゲートはその玄関口として２０２０年４月にオープン。丘陵地の起伏を生かして配置された建物とランドスケープ空間により、集落を訪れたような一体感と回遊性が創り出されています。石井さんと野田さんはランドスケープデザイナーとして屋外空間の設計に携わりました。設計コンセプトを関係者と共有することが最初の大きな仕事だったと石井さんは振り返ります。

「緑豊かな美しい丘陵地を見た時、この風景をできるだけ素のまま残したいと考えました。集客を狙った目先の仕掛けや、すぐに飽きられてしまう一過性のものではなく、長期的に愛されていく場所を作るという計画を、模型や断面図を使いながら時間を掛けて関係者の方々に説明しました」

今回の受賞では「終わりのない場づくり」という設計思想が高く評価されました。野田さんは次のように語ります。

「この場所に流れる時間の考え方として、完成したら終わりではなく、その先も永遠に続いていくことを大切にしました。もう一つ私達がこだわったのは、この斜面地に手すりのない長い道を作ることです。そこで４％の緩やかな勾配で、つづら折りの手すりのない園路を設けました。小さな子どもや車いすの方の視界も遮らず、誰もが一緒に上っていける、そういうところも評価をいただいたと思います」

４％の勾配が５％になるだけで、途端に体に負荷が掛かるのだそうです。実際に歩いてみると、坂であることを忘れて気持ち良く上ることができ、振り返ると眼下に里山の光景が広がっています。高さや種類をあえて揃えず、一見、無造作な樹木の植栽は、最終的に雑木林に育っていくことを想定していると石井さんはいいます。

「落ち葉で堆肥を作り、敷地内の畑で使ったり。森とは違う、どこかに人の気配が感じられる雑木林は、人と緑が共存する一つのあり方だと思います」

自然と人間が境界なく存在し、緩やかな時間が流れるこの場所に、ぜひ皆様も足を運んでみてはいかがでしょうか。

ランドスケープデザイナー
石井 秀幸さん（株式会社スタジオテラ 代表取締役）
野田 亜木子さん（同社 パートナー）

大学院生が「CSJ化学フェスタ」優秀ポスター賞を受賞

未来の蓄電デバイスを開発する研究

昨年10月20日から22日に開催された日本化学会主催「第10回CSJ化学フェスタ２０２０」で、関東学院大学大学院工学研究科博士前期課程２年（当時１年）の板倉誠さんが優秀ポスター賞を受賞しました。日本化学会は１８７８年（明治11年）に創立された、国内最大の化学系学会です。同フェスタは「産学官の交流」と「化学の社会への発信」を目的に開催され、コロナ禍で初のオンライン開催となった昨年度は約３千人が参加。そのうち「学生ポスター発表」は、研究に対して発表者が十分に寄与していること、質疑応答に優れていること、独自性が認められ今後の発展が期待できること等の観点から審査が行われ、９８６件の中から高い評価を得た発表１７７件に優秀ポスター賞が授与されました。

板倉さんは関東学院大学理工学部理工学科応用化学コースの学生だった当時から師事する友野和哲准教授の院生１期生で、キャパシタの研究に取り組んでいます。今回は「脂質膜による層状酸化物内のイオン脱離抑制と光照射による高容量化」というテーマで発表を行いました。

キャパシタとは電気を充放電する蓄電材料で、コンデンサや蓄電池とも呼ばれます。その材料にはいくつかあり、それぞれにメリットとデメリットがあります。友野研究室で採用している層状マンガン酸化物は、安価で入手しやすく充放電が早い一方、容量自体は少ないです。これまで層状マンガン酸化物の層に、金属錯体（イオン）を挟むことで容量が向上することは立証しましたが、使用を重ねる度に金属錯体が層状マンガン酸化物から脱離することが課題となっていました。そこで金属錯体に脂質を被せたところ、脱離が抑制された上、静電容量が大幅に向上する成果が得られました。また、金属錯体は有色のものが多く、太陽の光エネルギーを吸収した電池への応用も見据えています。

学部４年の時にも同フェスタに参加したものの、人生初めての学会だったこともあり、うまく質疑応答できず悔しい思いをした板倉さんは「だから今回は絶対に賞を取ろうと思っていました。通常ならポスター１枚を掲示して説明するところを、オンライン開催であることを活かして複数のポスターや追加資料を作成し、図や文字も見やすく工夫しました。質疑応答への対策も万全にして臨みました」と語ります。その狙い通り、審査員からはポスターの視認性や研究の独自性を高く評価され、終わった時点で「絶対取ったな」と確信したそうです。

板倉さんは今年度も同フェスタにエントリー済みで「元々、僕は人と話すのが好きなタイプです。目上の研究者の方々とディスカッションする経験を学生や院生のうちに得られれば、将来自分の財産になることは間違いないですし、チャレンジすることは楽しいです」と意欲を見せます。ちなみに今年度は、これまで使用してきたキャパシタ材料の、電池の正極材への応用研究がテーマだそうです。

後輩の面倒見がよく、普段からレポートの書き方や履修の相談にもよく応じているという板倉さん。来年３月には大学院を修了予定で、高校の化学の教員を目指しています。今後の抱負について尋ねると「友野先生の授業が面白くて、自分もこういう人になりたいと思って学んできました。何事もチャレンジしていく姿勢を見せていくことで周りから信頼され、楽しく自然に人が集まってくれるような教員になりたいですね」と力強く語ってくれました。

関東学院大学大学院工学研究科 博士前期課程２年
板倉 誠さん

友野研究室のメンバーや学部生の後輩が集合

コロナ禍を乗り越えて定期演奏会を実現
関東学院中学校高等学校オーケストラ部

今年4月17日、関東学院中学校高等学校オーケストラ部による「第14回定期演奏会」が川崎市のミューザ川崎シンフォニーホールにて開催され、これが引退公演となる高校3年生を中心に素晴らしい演奏を披露しました。コロナ禍で練習や活動が思うように行えなかった1年間、この日を迎えるまでには生徒達の様々な葛藤や努力、指導する先生方を始めとする多くのサポートがありました。そこで前部長の坂口智哉さん(高3)と、今年度部長を務める畠山慧士さん(高2)に当時の状況やオーケストラ部の活動についてうかがいました。

先が見えない状況での活動

関東学院中学校高等学校オーケストラ部は、7人の中学生による「アンサンブル同好会」として2005年に発足。翌年「オーケストラ部」に改称し、部活動へ昇格しました。顧問を務める繁下拓也先生の指導の下、現在は校内最多130名以上の部員が所属し、中高合同で活動しています。校内行事以外に、地域の小学校や福祉施設等での演奏など多岐に渡る活動を行っています。

昨年はコロナ禍により、全国の学校で部活動の休止や対外活動の中止を余儀なくされました。オーケストラ部も昨年4月の定期演奏会はオンライン開催となり、その後も休校や分散登校により練習もままならない状態でした。当時高校2年生で部長を務めていた坂口さんは、その時の心境を「墨汁のプールに落とされたみたい」といいます。

「本当に何も見えない、何をすればいいんだろうという気持ちでした。自分の後ろには大勢の後輩達がいて、それを先導しなくちゃいけないというプレッシャーもありました」

自分ではどうにもならない状況の中で、坂口さんはオンラインでの情報発信に取り組むことにしました。

「部内向けと部外向けに皆で動画を作成しました。部外向けは主に新入生を対象に部活動を紹介し、部内向けは部員達のモチベーションを高めることが目的です」

分散登校期間には、繁下先生の提案でビデオ会議ツール「グーグルミート」を使ったミーティングや、オンラインでのパート練習も試みました。7月頃には時間や人数を限定して校内で練習を再開。練習拠点である講義室には、飛沫防止のアクリル板やカーテンを設置するなど感染対策を施しました。従来のような練習ができない中で、新たな気づきもあったと畠山さんはいいます。

「礼拝堂で合同練習をする時、感染予防で間隔を空けるために、舞台上だけでなく下のフロアにまで広がって演奏したのですが、距離が離れるので音が合わせづらいんです。ただ、今まで音を聴いて合わせようという甘えた部分があったのが、指揮を見て合わせないといけなくなったことで、逆に演奏の質を上げることができたのかなと思います」

開催を信じて進めた準備

練習は再開したものの、先行きが見えない状態は続きました。相次ぐ行事の中止や、毎年出場している「全国高等学校選抜オーケストラフェスタ」も収録によるオンライン開催となりました。

「オープンキャンパスでの演奏も、かんらんさい(文化祭)もできなかった。定期演奏会だけはなんとか成功させたいとの思いで、僕達高2は頑張ってきました。意見の違いで喧嘩になることもありましたが、それだけ皆が本気で考えてくれたし、困っている時は助けてくれた本当にいい仲間達です」(坂口さん)

開催を信じて準備を進めた部員達。毎年製作するTシャツは、指揮者である繁下先生をモチーフにしました。3月の演奏会直前強化合宿は宿泊を断念し、三浦市のホールを借りて4日間バスで移動して練習することに。感染状況が落ち着かず、人数配置の問題による曲目変更など、最後まで予定通りには進みませんでしたが、多くの方々に支えられてきたと坂口さんはいいます。

「繁下先生もホールの予約など今回は本当に大変だったと思います。合宿をなんとか実現させようと遠くまで施設を見に行ってくださったり感謝しかありません」

前部長の坂口智哉さん(高3)と現部長の畠山慧士さん(高2)
Tシャツは定期演奏会でポップス演奏時に着用したもの

定期演奏会の様子。曲目はドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」他

指揮を務めるのは顧問の繁下拓也先生

感謝の思いを伝えた演奏会

迎えた演奏会当日。会場では保護者が検温を手伝ってくださり、観客は両隣を空席にするなど感染対策を徹底しました。学年別や様々な編成による演奏、衣装やダンスも楽しいポップスナンバー等に続き、3時間に及ぶプログラムの最後を飾ったのはドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」です。

「このためだけに1年間頑張ってきました。最後に交響曲が終わった後、引退生は一人ずつ先生に名前を呼ばれ、壇上に並んで部長がスピーチをするのですが、その時に見た景色は最高でした。自分達だけではここまで辿り着けなかったですし、とにかく皆さんに感謝を伝えたかった。5年間は本当に特別だったと今は心から思っています」(坂口さん)

これからのオーケストラ部

オーケストラ部は入部者のほとんどが初心者です。今年度は総勢137名で活動しています。今後の状況にもよりますが、演奏の機会が徐々に増え、昨年は中止となった9月のかんらんさいでも演奏予定です(8月現在)。畠山さんは今、部長としての辛さを味わっているのだそうです。

「百人規模の後輩達をまとめていくには、僕達の学年が運営をきちんと行って、全員のモチベーションを作り出さないと付いてきてもらえません。それを疎かにすると先生からは厳しく指導されますね。皆で協力して頑張っていきたいです」

今年度選んだ曲は「チャイコフスキー作曲交響曲第5番」。来年4月30日にはミューザ川崎シンフォニーホールで「第15回記念演奏会」を開催予定です。これからのオーケストラ部の活動にご注目ください。

 写真撮影時のみマスクを外しています。

躍動するチームと輝く個性、創部14年目の活躍を紹介
関東学院六浦中学校・高等学校ラグビー部 2021

中学男子ラグビー部「神奈川県春季中学校大会」7年ぶり優勝

優勝を決めて笑顔の部員達

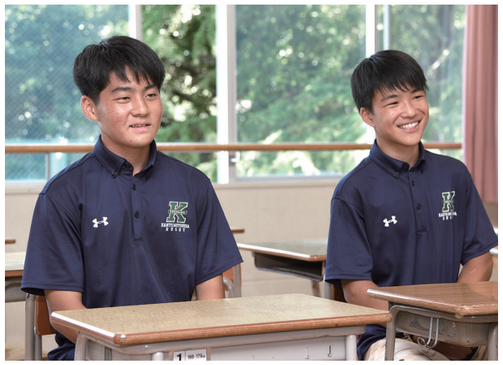
関東学院六浦中学校の男子ラグビー部が、5月9日に決勝が行われた「神奈川県春季中学校大会」で優勝しました。県大会優勝は7年ぶり、春季大会では初めての優勝です。

神奈川県立保土ヶ谷ラグビー場で行われた決勝の相手は、強豪の慶應義塾普通部。試合前の様子について、沢辺祐亜主将(中3)は「実は試合前の練習では皆、緊張していいプレーができませんでした。前半は不利な風下だったので、監督から前半は風に耐えて後半で思い切りいこうといわれて、皆が一つになって挑めたことが優勝に繋がったと思います」と振り返ります。

前半はフォワードもバックスも関係なく、序盤からボールを持ったら前に進むことを意識したそうです。最初にトライを決めたのは関東学院六浦で、そこから一気にチームは勢いに乗ります。その後トライとゴールキックを許して前半を5ー7で折り返しましたが、粂孝太郎副主将(中3)は「前半を終えて2点差だけだったので、風上になる後半に思い切り全員で攻めれば絶対に勝てるという自信がありました」と全く焦りを感じなかったそうです。

ラグビーを通じて人間的な成長を目指している

ハーフタイムには皆で気合いを入れ直し、後半は粘りの攻撃で2トライを奪います。最後は追い上げる慶應義塾普通部を振り切って17ー12でノーサイド。7年ぶりに頂点に輝きました。粂副主将は「終わった時はやり切った気持ちで一杯でした。大会前の練習で力を貸してくれた高校生の先輩もいて、自分のことのように喜んでもらえてうれしかったです。この経験を今後の大会にも繋げていきたい」と前を向きます。


沢辺祐亜主将と粂孝太郎副主将

次の大会に向けた練習風景

次の目標は秋季大会。目指すは春秋連覇、その先には東日本中学校大会も見えてきます。沢辺主将は「チームの仲がいいので、いい雰囲気のまま試合に挑んで結果に繋げていけるよう、主将として引っ張っていきたい」と気を引き締めます。今後の男子ラグビー部の活躍にご期待ください。

ホームグラウンドに集合した中学校男子ラグビー部員と林広大総監督

関東学院六浦中学校・高等学校ラグビー部

2005年に男子部員5人による愛好会として発足し、2008年に正式に創部。2014年からは大学日本一を経験したメンバーが中心となって指導を行っています。2015年には神奈川県内初の女子ラグビー部を創部し、男女共高校のラグビー推薦入学制度も始めました。人工芝のホームグラウンドや、関東学院大学の天然芝3面での練習、専用ウェイトルームや寮を備え、全国トップクラスの環境を誇ります。

関東学院六浦中学校・高等学校ラグビー部 林 広大総監督のコメント

決勝前のウォームアップの時、いつもと違って緊張しているのか調子が悪く、正直、厳しいかなと思っていました。ですが、中学生というのは何かのきっかけでスイッチが入るとガラッとで変わるところがあります。この試合では、風下の不利な状況で最初の得点を取ったことで一気に流れが変わりました。指導者としては、中学生のうちに土台を鍛えて、高校へと繋げてほしいと思っています。今は秋の大会に向けて、やれることは全てやって、春と秋の二冠を目指します。

女子ラグビー部員2名が日本代表候補合宿に参加

公益財団法人日本ラグビーフットボール協会主催で、埼玉県熊谷市で実施された「女子7人制強化合宿」に、女子ラグビー部所属の矢崎桜子さん(高3)と松村美咲さん(高2)が参加しました。二人は4月21日～23日、5月30日～6月6日に日本代表候補選手らと練習。6月5日・6日には「太陽生命ウィメンズセブンズシリーズ2021第3戦熊谷大会」に、合宿に参加した選手と共にチャレンジチームとして参戦し優勝しています。

矢崎さんは「選ばれた時はとにかくうれしかったです。スピードやフィジカルの面で自分はまだ足りないと実感しましたが、技術面では手応えを感じました」と自己分析します。松村さんは「代表レベルの人達は、プレーも人間性も一流だと感じました。五輪の最終選考を控えた時期でピリピリしてもおかしくない中、私達高校生をやさしく受け入れてくれてうれしかったですね」と話します。

桜のエンブレムの代表ジャージを着て

今後の目標について聞くと、松村さんは「自分の武器であるキックに磨きをかけ、フィットネスやスピードを強化すること」、矢崎さんは「女子ラグビー部としては去年準優勝だった、10月開催の『全国U18女子セブンズラグビーフットボール大会全国大会』で優勝すること。個人的には2024年のパリ五輪に出場すること」と答えてくれました。関東学院六浦から世界へ、二人の活躍にご注目ください。

松村美咲さんと矢崎桜子さん

関東学院六浦中学校・高等学校女子ラグビー部 梅原 洸監督のコメント

矢崎は中学生の頃から代表になりたいと常に公言してきた度胸と意志の強さがあります。技術的には男子に負けないものがあり、今は夢をつかみ始めているところです。松村は校内で英語がトップクラスで、外国人監督や選手とも通訳を介さず話すことができます。怪我さえ治れば、7人制はもちろん、15人制でも代表入りが期待できる逸材です。二人共、世界を目指して頑張ってほしいと思います。

写真撮影時のみマスクを外しています。

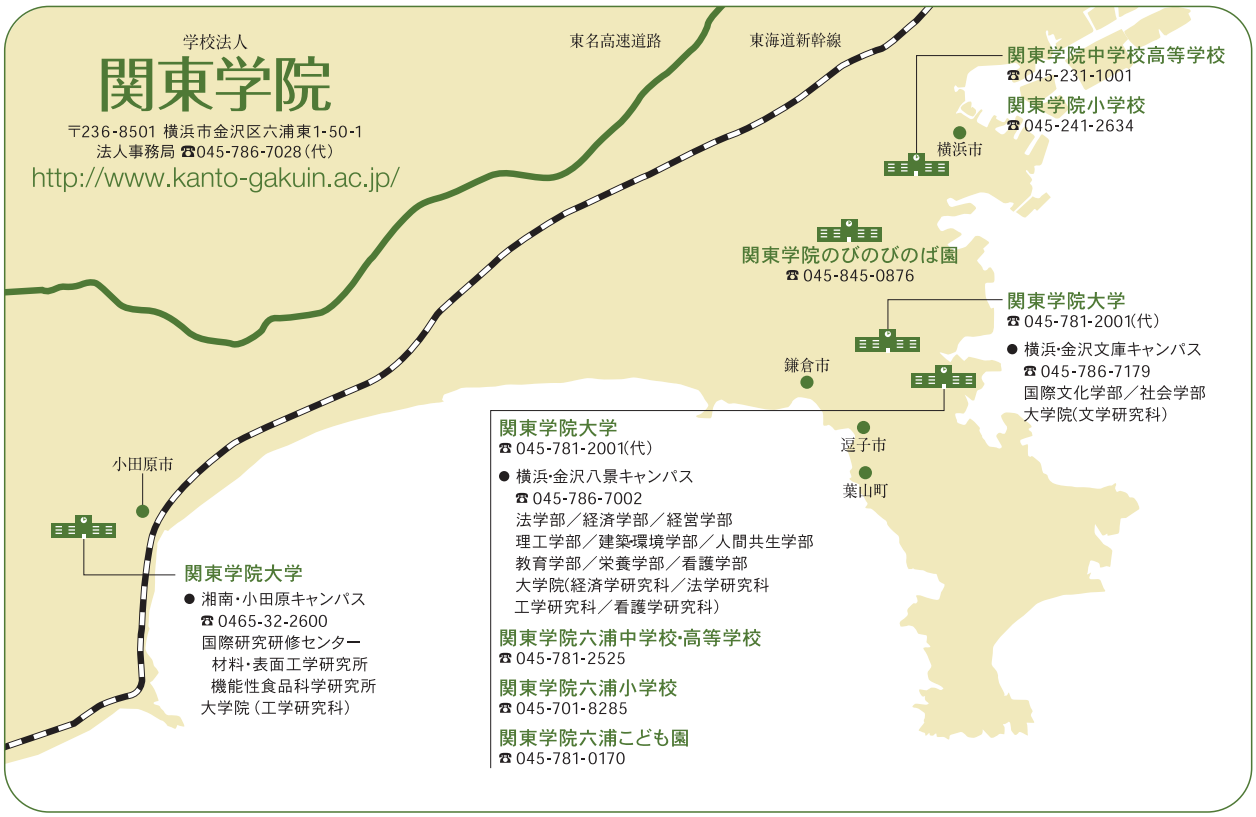
お知らせ

「関東学院大学 インターナショナル・レジデンス」入寮者の申し込みを受け付けています。

2021年3月に新設した国際学生寮「関東学院大学 インターナショナル・レジデンス」では
様々な地域の学生が共に暮らしながら共に学び、多様な価値観を学ぶことができます。
400人が暮らす寮は、キッチン付きのダイニングスペースやリビングをはじめ、
学修や課題に集中できるスタディラウンジなどを完備。
自由に活用できるテレビルームやシアタールーム、青空を見渡せるオープンテラスでは、
学年や学部の垣根を超えた学生とコミュニケーションを図ることができます。
建物には、生活用品を扱っているドラッグストアやクリニックも入居しており、
安心して生活を送ることができます。
また1人ユニット、2人ユニット、4人ユニットの3タイプの部屋を準備しており、
東京や神奈川にお住まいの在学生も入寮可能です。
随時申し込みを受け付けておりますので、詳細は以下のQRコードよりご覧ください。

関東学院大学 インターナショナル・レジデンス

- 募集人数：400人
- 所在地：横浜市金沢区六浦1-14-12
  (横浜・金沢八景キャンパスから徒歩2分)



関東学院学報 第60号 2021年9月20日
発行：関東学院 編集：関東学院大学広報課